

# 医療における情報(薬剤)の標準化を考える

医療データ活用基盤整備機構

折井 孝男

## 複雑化する医療に

## おける標準化

医療は医学、薬学、看護学などにより構成され、急速な進歩に伴って高度化、複雑化している。もちろん、個々の患者の多様性も考慮しなければならぬ。医療DXが唱えられている中で、医療従事者全体の業務負担も大きくなっているのが現状である。記録という面からは、電子カルテ

への記載、薬剤管理指導記録、看護記録の記載など、多くの時間を要している。さらに、患者に対する説明等においても、同様の内容について何回も繰り返している。検査、手術などにおける同意では、患者側も説明内容について、説明してくれる医師に対して気を遣い、

特に質問をしないという流れが目立つ。このようなことが毎日繰り返されていると言える。このような同意を求めることについては、人工知能(AI)の利活用により、患者側も分からない内容について、繰り返し確認することができるようではないだろうか。

しかし、AIの利活用については、日本語の難しさも問題になる。病気の概念が日々変わっていく中で、辞書機能も進化していく必要がある。英語では、医師が話した内容をテキスト化していく技術は進んでいる。日本語領域においても、症状等の用語を自動的に変換できるようになっており、正しい病名を予測できるようにしている。

標準化につながる薬物療法のプロトコールを作成することができれば、困っている患者、苦しんでいる患者を助けることにつながる。そのためには、医

現在、標準化が過度に進められようとしている。患者と医薬品との関係は、人と人との尊厳が保たれて成り立っている。思いやりの大切さと共に、ここでは医薬品の情報基盤となるものとして、情報技術を患者のた

めに生かしていくことが大切であると考え。AIの利活用について、少し触れた。AIの利用によって、患者に対しより正しい診断、適切な治療、薬物療法を提供することができると考える。その結果、在院日数の短縮、医療費減少など、働き方の確保にもつながる。

AIホスピタルは「思いやりのある医療を患者に」ということになると思う。誤処方などのヒューマンエラーを見つけないことが患者だけでなく、医療従事者全体を救うことになる。人では行えないことは人が行い、AI、ロボットができることは人が行わない。つまり、人と人の触れ合い、思いやりが大切である。AIによる医療、デジタル医療は医療業務の効率を図るだけでなく、患者に向き合う時間を作るという働き方改革にもつながる。そのためには医薬品の情報の標準化から始めることが、医療の質を高めるための基盤になるということができる。

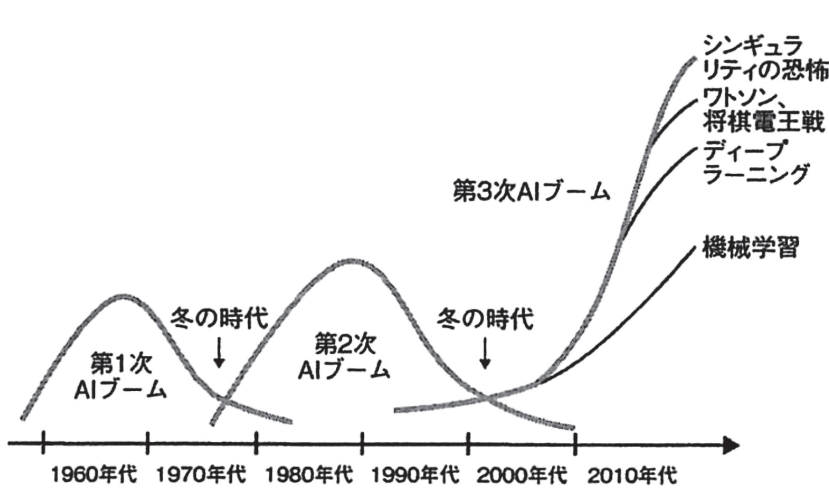


図 AIブームの流れ

標準化につながる薬物療法のプロトコールを作成することができれば、困っている患者、苦しんでいる患者を助けることにつながる。そのためには、医

**\*人工知能：Artificial Intelligence (AI)**  
 という言葉が初めて登場したのは、1956年夏に米国で開催されたワークショップであると言われている。

日本においても、AIを研究している先生方からは、10年ほど前の意見ではあるが、「人工的に作られた、知能を持つ実体。あるいは、それを作ろうとすることによって知能自体を研究する分野である」「知能を持つメカ、ないしは心を持つメカ」「人工的に作る新しい知能の世界である」「人工的に作られた人間のような知能、ないしはそれを作る技術」と定義されている。